

読書の軌跡と雑感

介護福祉学科特任教授 高橋 美岐子(2020. 3. 24)

皆さんは生まれてから今までにどんな本と出会ってきましたか？

時間の経過とともに薄れていく記憶の中から、半世紀以上前の時代に遡り私と本のつながりを振り返ってみた。

小学生の頃、友達と外で遊ぶことがほとんどで勉強した記憶はあまりない。そんな私が“読書”と記憶している本との出会いは小学校高学年であった。読む本は偉人の伝記が中心で、週末や連休になると学校の図書室から本を借りては読んだ。野口英世や二宮金次郎、夏目漱石、宮沢賢治、リンカーン、エジソン、ライト兄弟…。その中でもナイチンゲールやヘレンケラーは、看護師という職業選択に強い影響を与えてくれたように思う。

中学校や高校では、部活や通学などの関係から、しばらく読書から離れる時期があった。中学校の音楽の先生は授業の都度にクラシック音楽を聞かせてくれた。その影響からか、ベートーベンやバッハ、シューベルトなどといった音楽界における著名人の伝記に興味を持った。

看護学校は全寮制であったため、刺激的で新鮮な体験の多い3年間を送った。ラジオの深夜放送に浸るとともに本もよく読んだ。川端康成、芥川龍之介、森鷗外、太宰治、夏目漱石、芹沢光治良…。また、この頃読んだ闘病記は、その後の私の価値観に大きな影響を与えてくれたと思っている。

社会人になってからは、闘病記や推理小説、生と死に関する小説を好んで読んだ記憶がある。また、子供には絵本をよく読んだ。子どもも暗記するくらい同じ絵本を何回も読み、子供より先に眠ってしまうこともしばしばであった。

この間半世紀以上、社会は大きく変化し読書を取り巻く環境もまた大きく変わっていった。私の本選びは行き当たりばったりである。大方は、書店に行って、書名、書き出し、目次等に目を通して関心があれば購入することが多い。その時々注目される本にはあまり左右されず、好んで文庫本を選ぶ。文庫本の紙の匂いは何となく郷愁を誘い、バックに入れてもさほど邪魔にはならないし、安価である。流行が落ち着くころに単行本が文庫化され、それを買い求める。常に時代に乗り遅れる私であった。

教員になってからの専門書は例外だが、図書館に行って本を借りることはあまりなく、手にした本は購入することが多い。本は自分の財産であり、手元にあることでまたいつか読むことができると思っている。初めて読むときとそれ以降に読むときでは、時代や自分の価値観などが変化して内容の受け止め方も変わっているように思う。本にふれた後にその土地を訪れることもあり、自分がイメージしていた風景と合致していると嬉しい気持ちにもなる。

“本”は意識するか否かを問わず、ひとの気持ちを落ち着かせてくれたり、奮い立たせてくれたり、考え方や生き方にヒントを与えてくれていると思っている。

自分が生きている間にもう一度読みたいと思う本は、すぐ手の届くところにおいてある。しっかりと茶色に染まった文庫本。果たして私の手にとられ再度読まれるのはいつ訪れるのか…。